
イケメンプロデュース

taktoto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イケメンプロデューサー

【Nコード】

N1902H

【作者名】

tak toto

【あらすじ】

イケメンと一般人が贈る青春物語です。

プロローグ（前書き）

名称は全てフィクションです。
予めご考慮ください。

プロローグ

「てめえ…ふざけんじゃねえぞ!!」

僕の頬・腹・足に不良達の拳や蹴りが突き刺さる。

「痛っ…」

御覧の通り僕は不良に絡まれている。別に不良達に何かした訳でもない。

こいつらは理由もない暴力を、僕に振るっているのだ。

何でこんな目にあうんだろう。

そんな事を考えながら、必死に不良達の怒りが収まるのを待っていた。

「何をしている!!やめろ!!!!」

担任の藤川先生

「やべえ…」

そそくさと逃げ去る不良達。逃げるくらいなら最初から暴力なんてやめればいいのに…。

「全く…佐藤のヤツめ!!!大丈夫か?幸田。」

佐藤翔太は学校でも腕っ節なら上位に入る。

身長は180センチを超えた大男だ。欠点と言えば不細工で勉強が苦手な所。

それに対し僕、幸田健は身長160センチ。勉強はまあ、普通だ。運動も普通。顔も…普通。自漫出来るものはたいして無いが、ギャルゲーは人一倍得意だ。

考えてみれば僕のこのスペックは、イジメ易いスペックではないのか。

「幸田？」

心配そうに僕を覗き込む藤川先生。藤川徹は一年の時から僕の担任だ。

その風貌は如何にも熱血先生で、暑苦しささえ感じる。だが、良い先生だ。

「大丈夫です。慣れてますから。」

一言僕は言つとフラフラと立ち上がった。

「慣れたらダメだろ！！俺が何とかする！！」

イジメの現場を目撃した藤川先生は息巻いている。

まあ、先生の言つ通りなのだが、余計な事をされると面倒だ。

「本当に大丈夫ですよ。その内やり返してやりますから！」

小さくガッツポーズをしてみせる。そんな気は更々無いのだけど。

「わかった！辛かったら何時でも先生に相談してくれ。」

僕は小さく頭を下げ、その場を後にした。急がないとバイトに遅れる。

駅を二つ越えた所に僕のバイトするメイド喫茶がある。趣味と実益が一致した素晴らしい仕事だ。僕はこの仕事に誇りを持っている。

先に言っておくが、僕は別にオタクでは無い。ただ単に女の子が好きだけの一般人。

バイトに向かう電車の中。普段は誰とも会わない路線だが、なぜかこの日。

イケメン軍団に遭遇してしまった…。

イケメン軍団

読者モデル等に出演している地元では有名なグループだ。

僕の通う私立青葉学園にもグループの一人が在籍している。

私立青葉学園

渋谷区の一角にあり、普通科・体育科・英文科を持つ都内でも割と上位に入る学力の学校。

校風は自由をモットーにした生徒主体型の学校だ。

イケメン・美女も多い人気校。

そんな学校に僕や佐藤が在籍しているのもどうだろう。

そんな事を考えているとイケメン軍団の話声が耳に入った。

「なあ、安田。あいつお前と同じ学校じゃねえの？」

一人が僕と同じ学校に通う安田真人やすだまひとに話しかける。

安田は一瞬困った顔を見せた。それはそうだろう。

イケメン軍団の一人が、こんな僕と同じ学校なんて恥だ。

「…あー。そうかも。制服一緒だし。」

「へー。お前の学校にもあんなダセー奴いるんだな。」

余計なお世話だ。僕は僕なりに楽しく生きてるし、お前らに価値観を決められたくない。

「…楽しく…か。」

本当は分かってる。こんな生活に嫌気がさしているのも、楽しくないって事も。

そう思わなければ、僕なんてただの…。

そこまで考えたが、考えるのを止めた。虚しくなってくるだけだ。

「まあ、そう言うな。俺と同じ学校なんだぜ？」

安田がフォローしている。それが余計に腹が立つ。結局お前らは見下してるんだ…僕を。

そう思った瞬間、僕は立ち上がってイケメン軍団に向かって言い放った。

「余計な事言うなよ！！僕の気持ちなんてお前らに分からないだろうー！！」

はっ…。僕は何を言ってるんだ…。これじゃあ、余計惨めなだけじゃないか。

「なんだよ…あいつ。ウゼエ。」

イケメン軍団はこちらを見ながらブツブツと言っている。思わず僕は謝った。

「…ごめんなさい。」

次は 。 。 でございます。お降りの際は…

僕は逃げるようにその場を後にした。恥ずかしさで顔は真っ赤になっている。

目をつけられたらどうしよう…。そんな事を思っていた。

「幸田…。」

安田が何か言いかけたが、僕には気に留めている余裕は無かった。バイト先へ行こう。メイドさん達が僕を癒してくれる。

思考路線は既にオタクモードだが、変なプライドが僕をオタクと呼ばせない。

このイケメン軍団との出会いが、僕の人生を180度変えてしまうなんて…。

その時の僕には想像もつかなかったんだ。

プロローグ（後書き）

最後まで読んで下さり有難う御座います。

第一話：安田真人の場合（前書き）

凡庸な高校生幸田健は、バイトに向かう途中でイケメン軍団と遭遇。イケメン軍団の一人は同じ学校の生徒であった。

第一話：安田真人の場合

「お帰りなさいませ ご主人様」

若い女の子がメイド服を着てお客様をもてなす…。

そんな夢のような喫茶店。俗に言うメイド喫茶。

僕、こうただけし幸田健はここでもう1年、厨房係として働いている。

イケメン軍団から逃げる様にバイト先へ向かい、いつもの様に皿を洗っている。

「いってらっしゃいませ ご主人様」

今日もメイドさん達は美しく働いている。

皆それぞれ目的を持ち、夢をおいかけながらバイトしているんだろう。

僕はどうなんだ…。

イケメン軍団とのやり取りで、心を感じた虚しさが消えない。

折角の楽しいバイトも何処か上の空になってしまふ。

「…気にするな。僕はあいつらとは違うんだ。」

自分に何度も言い聞かせる。そうしないと余計な事を考えてしまうから。

「僕は…一体何がしたいんだろう。何が出来るんだろう。」

気づけば独り言を言っている。こんなに僕は悩むタイプだったのだ

ろうか。

そんな僕に気を使つてか、メイドさんの一人が話しかけて来た。

「幸田君？どうしたの？何か悩んでる？」

突然メイドさんに話しかけられ、心臓が口から飛び出そうになる。

「さささ…佐川さん！？べ…別に…」

佐川涼子さわがわりよしは僕と同時期に入店した女の子だ。

優しく明るい性格に、黒いロングヘア。顔もメイドさん達の中ではトップクラス。

そんな人に心配して貰えるとは、ある意味幸せな男だよ僕は。

「そう？なんだか元気ないみたいだけど…。いつもはもっとニコニコしてるじゃない？」

そう言われると心が痛む…。ニコニコしていた訳じゃなく、メイド姿の女の子を見てニヤニヤしていただけなんだ。

「ゴメン。心配してくれて有難う。本当に何でもないので。」

精一杯明るく返事をする。空元気だけど、佐川さんに心配をかけてもしょうがない。

「そう。じゃあ、私戻るから。」

割とあっさりホールに戻った佐川さん。社交辞令だった様だ。

「うーん…まだフラグは立っていないなかったか。」

意味不明な言葉を口走りつつ、ひたすら皿洗いを続ける。
そんな時、ホールから大きな歓声が響き渡った。

「キヤーツ!!!」

女の子達の黄色い声、何があったのか分からないけど何かあったらしい。

僕はホールへ状況を確認しに向った。

「…!?!」

目の前にはイケメン軍団筆頭、安田真人やすだまことが居た。

あまりにも場違いな光景に僕は目を疑った。固まっている僕に安田が話しかけてきた。

「よう。ここで働いていたのか？幸田。」

女の子達の視線が一斉に僕に向く。皆不思議そうに僕を見ている。

「…悪い？僕の勝手だろ。何か用？」

そっけない態度で安田に返事をするが、安田は気にする様子も無く話を続ける。

「そっか。お前に話があるんだけど。今日何時上がり？」

「…9時だけど。」

「分かった。その時間にまた来るわ。」

そう言い残すと、安田は店を後にした。その後は女の子達の質問攻めであった。

「安田君と知り合いなの!？」

「安田君と友達なの!？」

「安田君と…」

どいつもこいつも安田安田安田安田…五月蠅いな。

僕はその後、一切厨房から出る事は無く、時間が経つのを待っていた。

バイトが終わると、安田が入口で待っていた。本当に来るとは思ってもいなかった。

大事な話なのだろうか。

「お疲れー。腹減らない?飯食わねえ?」

この男は何を企んでいるのだろうか。

普段話した事は多分無いはずだし、接点が見当たらない。

安田に連れられるがまま、近くのファミレスへと向かった。

ファミレスに入ると、周りからざわめきが起きる。当然だろう。

「何か騒がしいな?」

笑いながら安田が話しかけてくる。この男はワザとやっているのか?自分が如何にモテるかを僕に示しているのだろうか。

一通り注文を終えると、安田はこちらをじっと見ている。

「…何？」

「…あのさあ、俺達どっかで会ってない？昔ぞ。」

何を言っているんだろう？

古典的なナンパ方だが、安田が言つと格好良く見えるのが小憎らしい。

と言つより、男をナンパしてどうするんだろう。

「僕、そっちの趣味はないから…。」

僕がそう答えた瞬間、安田は「こいつ何言ってるんだ？」的な表情を浮かべた。

どうやらナンパでは無いようだ。

「…そー言つ意味じゃない。」

こちらの気持ちを察してか、安田はフォローを入れる。

「…話つて何？」

正直言つて、一緒に居たくなかった。

周りにどうしても比較されるだろうし、そんな感じの視線が痛い。あまり長くなると耐えられそうに無い。

「お前にお礼が言いたくつてさ…。」

安田は小さく呟いた。お礼を言われる様な事は何もしていない。

僕は安田にそう言った。

「僕にお礼？人違いしていない？お礼を言われる覚えがないよ。」

安田は驚いた表情を浮かべながら、僕に問いかけた。

「覚えていないのか！？中学一年まで同じクラスだっただろう！？」

言われてみれば、安田と同じ名前の同級生は居た。

しかし、目の前の安田ほどのイケメンでは無かった。

「確かに…中学一年の時、安田君って居たけど君とは似て無いよ。」

その言葉を聞いた安田は突然笑い声を上げ、僕の肩をバンバン叩きだした。

「ははっ！確かにわかんないかもな。俺、変わったから。」

本当にあの安田君なのか？僕は必死に共通点を捜していた。

そう言えば、安田君は左肩にホクロがあっただは…。

僕は確かめるべく安田の服を脱がした。

「ちょ…おい！！」

「いいから。左肩を見せて。」

恥ずかしがり、抵抗する安田の肩を無理やり覗き込むと…

「ホクロだ…。」

安田は服を直しながら僕に言った。

「これが証拠だろ？」

どこか嬉しそうだ。僕は小さく頷いた。

安田君「安田真人やすだまことの図式が頭に浮かんだ。

しかし…あの安田君がここまでイケメンになるとは誰が予測しただろう。

僕はそのギャップが面白くって、不覚にも声を上げて笑ってしまった。

釣られて安田も笑っている。暫く二人で笑い合っていた。

その後は二人で今までの経緯を語り合い、時間はどんどん過ぎて行った。

時間は深夜0時を回り、「そろそろ帰ろう」と安田が言いだしたので帰る事にした。

別れ際、安田はこう言った。

「…幸田。お前が俺を変えたんだ。デブでどうしようも無くイジメられていた俺を。」

「僕は…。」

そこまで言うと安田が僕の言葉を遮り、続けて喋った。

「いいから聞いてくれ！お前だけが、俺が転校した後に手紙をくれた。その手紙が俺を変えたんだ！」

安田に送った手紙の内容…

僕は必死に思いたそうとしていた。

「お前が俺にどうすればイケメンになれるかアドバイスをくれた。」
…思い出した。手紙の内容はこうだ。

安田君。お元気ですか？転校してもずっと友達で居て下さい。

安田君はダイエットして、髪を綺麗にトリートメントして

お肌のケアに気を付ければ、きっとすごいイケメンになるよ！！

次に会う時はそんな安田君を見たいです。 from 健

思い出すだけで恥ずかしい。顔が真っ赤になって行くのが自分でも分かった。

早くこの場を立ち去りたい…。そんな気持ちで一杯だった。

「ゴメン。偉そうな事書いてたね…。それじゃ、またね。」

僕はその場から逃げるように走り去った。

次の日学校で会うかと思うと恥ずかしくて眠れなくなっていた。

学校へ向かうとなにやら僕を見て、皆がヒソヒソ話しをしている。

あまりいい気分では無かったが、自分のクラスへ向かった。

そこにはイケメン軍団が待ち構えていた。

「えー！？」

思わず声を上げる。僕の机はイケメンで囲まれ、ちょっとしたホストクラブ。

ツツコミ所は満載だが、どうしたものか。

「おはよう！幸田！」

安田が爽やかに挨拶をして来るが、クラス皆の視線が痛い…。

「安田君…ちょっと屋上行こうよ。」

いたたまれなくなり、場所を変えようと提案した。

イケメン軍団は僕の後を何も言わずについてくる。

不思議な光景だった。イケメン達が僕を中心に後ろからついてくる…。

周りからは様々な声と視線が僕に浴びせられる。

屋上に着くと、安田君が話しかけて来た。

「幸田…。お前に頼みがある。」

なんだろう。金か？

「…お金持っていないよ。」

先に言ってみたが、笑われただけだった。その頼みの内容は意外な事だった。

『俺達をプロデュースしてくれ!』

イケメン達が僕に頭を下げている。僕に一体何を期待しているのか分からない。

だけど、面白そうだ。

「分かったよ。その代り僕の指示には従ってよね?」

イケメン達は活気づいた。何となく裏を感じたが、退屈だった毎日を変えるには充分だ。

こうして僕は、このイケメン軍団をプロデュースする事になったの
だが…。

どうすればいいんだろ？

そんな不安を抱きつつ明日からの生活が始まる。

第二話・山下修平の場合（前書き）

ひよんな事からイケメン軍団のプロデュースをやる事になった幸田。彼らの目的は不明だがやってみる事に。次なる対象者は…。

第二話・山下修平の場合

「プロデイース…か。」

ひよんな事からイケメン軍団のプロデイースをする事になった。

僕は別にオシャレでもないし、口が旨い訳でもない。

こっただけし
幸田健は一般人なんだよ！！

「…今更言つてもしょうがないか。」

自分の中で区切りをつけ、僕は屋上を後にした。

教室には戻りたくなかったけど、もうすぐ一時間目の授業が始まる。

「はあ…。」

案の定、教室に入ればヒソヒソ話に質問攻。

「…う…う…の…って…苦手なんだよな。」

僕の気持ちなんてお構いなしに周りは騒いでいる。

「寝ちやおう…。」

僕の意識はそのままブラックアウトした。

今日はバイトもないし、早く帰ろうと心に決めた。

放課後になると入口にはイケメン軍団が待ち構えていた。

逃げられない様だ。

あの時は面白そうだと思っただけど、やはり断るべきだろう。

何をすれば良いのかわからない。

「遅いぞー。幸田」

相変わらず爽やかなのは安田真人だ。やすだまさと

元はと言えばこいつが全ての元凶なんだな…。

何を企んでいるんだろうか、今の僕には計り知れない。

「ゴメン。やっぱり断ろうかと思って…。」

素直にそう言った。

『えーっ！？今更かよー！！』

イケメン軍団がハモツた。意外と笑える風景だった。

「何をすればいいのかわからないし…。」

皆困った顔をした。一度引き受けただけに申し訳ないと思う。
でも、無理な事は無理だ。

間をすり抜けて帰ろうとした僕を、少し小柄なイケメンが塞き止めた。

名を山下修平やましたしゅうへいと言っらしい。

「待って!!」

山下はどちらかと言えばかわいい系の男子といった所か。
僕と慎重は左程変わらないとは言え、体は割と筋肉質だ。

「…もったいないな。」

僕は思わず呟いてしまった。

「え…?」

山下はキョトンとした表情でこちらを見ている。

後ろでは安田がニヤニヤしながらこっちを見ている。

何を期待しているんだか。

「もったいないってどう言う意味?」

山下は僕に問いかける。しょうがないから思った事を言ってみよう。それでダメならこいつらも納得するだろう…。

「顔はかわいい系なのに、その筋肉質の体が価値を落としてると思うよ。」

山下は驚いている。というか、イケメン軍団が皆驚いた様子。

山下が口を開いた。

「でもさ、ブヨブヨだったら格好悪いじゃん?だから鍛えてるんだけど…。」

僕はすかさず反論した。

「ブヨブヨまではいかないが、もっと筋肉を減らして全体を華奢に見せるんだ。」

かわいい系の男子は筋肉つけるべからず。これ常識也。

変なギャップがあるよりストレートな方が受ける。…気がする。

そんな事を考えていると、突然安田が喋り出した。

「聞いたかみんな？コレが幸田のプロデュースだよ！」

湧き上がる歓声。ひよっとしてこいつら馬鹿なんじゃ…。特にプロデュースした訳でもないのに。

「すげえ！」

「目からつろこだぜ！」

「その手があつたかー！」

等と声が上がっている。一体これはどんなノリなんだ？ノリきれずに呆然とそんな光景を眺めていた。

「よし！幸田！」

安田が何か思いついたらしい。聞きたくもないけど。

「…何？」

「今日から山下を宜しく！」

ピシッと親指を立てる安田。リアクションが古いのが気になるが。山下もノリノリだし…。しょうがない。

「わかったよ…。山下君、ついてきて。」

「うん！じゃあ皆、またねー」

ブンブンと仲間に向かって手を振る山下。その仕草は愛らしく見えた。

仲間か…。僕には関係ない。

今まで「仲間」と呼べる人間はいなかったから、それがどういいう気持ちなのかわからない。
僕は彼らにとってなんだろう？段々とそんな事を考えだした。

山下と二人街を歩いてみる。

さすがだ。黄色い声が沢山聞こえてくる。
まずは…肉体改造かな？

ブツブツいいながら歩いていると、山下の姿が見当たらない。
はぐれたのか…。

「わあ！…！」

「わあ！？」

突然声を掛けられ、へんな声が出てしまう。
声の主は…山下か。

「びっくりした？」

へへへ。とかわいく笑う。なんだか可愛さ余って憎さ100倍だ。

「びっくりしたよ。」

「ごめんね。はいコレー!」

コレは…焼き鳥!?

「なんでだーっ!」

思わずツッコんでしまった…。

「焼き鳥キライ?」

ウルウルとした目で僕を見る。しかし、冷静にツッコむ事にした。

「こういう時はアイスとかジュースじゃないと…。可愛さが活かせないでしょ?」

ハツとした表情で僕を見る山下。思ったよりも大変そうだ。

それから一週間は徹底したキャラ作りを行う事にした。

二週間目、仕草の指導

三週間目、喋り方の指導

四週間目

遂に四週間目に突入した。僕が見る限りはパーフェクトに近い。

しかし、何かが足りない。一か月の肉體改造により、筋肉は落ちた。仕草、喋り方も完璧に近い。だとすれば…。

「師匠!今日は何の訓練ですかあ?」

いつの間にか僕を師匠と呼びだした山下。
見た目はより可愛らしくなっており、そこら辺の女の子より女の子っぽい。

「後は服装だね。」

そう。イケメン軍団は統一されたファッションスタイル。
これは契約上の問題等もあるが、やはり個性に合わせるべきだ。
そして彼を活かす物は…

「レディース物を買に行こう。」

彼は素直に頷いた。ここまで来たらやるしかない。

僕にもプライドは有る。やってやるさ!!

「緊張する…。」

さすがに、女性の中に男二人が並んで立っている状態。
そんな姿はただの変態にしかみえないが、山下は左程きにしていない様子。

「どんな服を買うの?」

山下に合う服か…。僕は必死で選んでは試着させ、似合うスタイルを研究した。
そして…。

「出来た…完璧だ…。」

雰囲気はボーイッシュな女の子といった所か。
我ながら上出来だと思う。

周りの女性客の視線が山下に注がれている。

「これなら…イケるかな？」

いつの間にか僕は楽しんでいた。認めたくないけど。
僕は約束の場所へ向かった。

「なんだコレ!？」

約束の場所に着くと大勢の女の子とイケメン軍団。
中央にはステージが用意されている。

「驚いただろー。この日の為に準備したんだ。」

物凄く楽しそうな顔で安田が話しかけてくる。
イケメン軍団も皆楽しそうだ。

「さあ！早く山下をステージへ!!」

言われるがままに、僕は山下をステージへと案内した。
突然音楽が鳴り始める。

「さあ！お待たせ致しました!!」

この声は…安田？

「我らがキューティクルメンバー！山下が更にパワーアップ!!」

どうやらお披露目ショーをやりたいらしい。
やっぱりこいつらは馬鹿なんだと思った。

「おまたせ致しました！山下修平登場ッ！！！」

スポットライトが眩しい。当の山下は笑顔でこっちに向って手を振っている。

そしてステージへと駆け上がった。

「ワーツー！！！」

大歓声が巻き起こった。僕が今まで聞いた事が無い、地鳴りの様な声。

山下は堂々とステージ上を歩いている。

思わず僕は見とれてしまった。

「幸田……」

安田が話しかけて来た。僕は感動したのを隠そうと俯うつむきながら振り返った。

「これがお前の才能なんじゃないか？」

僕は……。言葉が見つからず、ただステージ上の山下を見つめていた。

「俺達にはお前が必要なんだ。」

安田の言葉に不覚にも涙が出そうになった。

初めてだった。人に必要とされている感覚は。

僕は静かに頷うなずき、安田に言った。

「悪く…ないかな。」

我ながら素直じゃないと思う。安田は僕の本心を見抜いている様で、笑顔で僕の肩を叩いた。

心地よかったのを覚えている。

やれるだけやってみるか。

この日から僕は真剣にプロデュースに打ち込む事になるのだが、心の中には未だに引つかかるものが残っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1902h/>

イケメンプロデュース

2010年10月21日17時09分発行